新潟大学教育学部附属教育実践研究
指導センター研究紀要、10 (1991)

小・中・高における「家族」領域学習
—教材研究と授業展開の実際—

The Sequence in Teaching "Family" Area of
Home Economic for the Primary and Secondary School –
Materials Design and Teaching ––

高 橋 類 子*・木 村 節 子**・遠 山 信 子***
本 多 満喜子****・池 野 カズミ*****
Ruiko Takahashi, Setujo Kimura, Nobuko Tooyama
Mamiko Honda, Kazumi Ikeno

ABSTRACT

Materials designs were attempted for the 'family' area in the home economics which is intended for male and female students in each school and the instruction was given using the materials which were developed with due consideration to the developmental stages of the learners. The teaching was supported by the underlying wishes on the part of the teachers for the students' wellbeing as human beings. The hypothesis concerning teaching procedure and the students' participation were set up. The results follow :

1. The primary school learners demonstrated their interest in the study of the family through learning their birth and their relations with the family members.
2. The material designs for the middle school were centered around the human relationship. It was observed that the learners who had not been concerned about intercations with others showed significantly more favorable attitude toward the subject after the instruction.
3. The high school students were engaged in studying various problems in family life in the modern society and understood that the present life style would function as the basis for their life in the future through discussion of happy life. They also discussed aspects of the end of life.
4. The university students who observed the instruction gave high evaluations to this experiment.

* 新潟大学教育学部
** 実地指導講師
*** 新潟大学教育学部附属長岡小学校
**** 新潟市立大形中学校
***** 新潟明訓高等学校（非）

I　はじめに

我々が人間関係を育成する家庭科の学習内容に関する実践的研究に着手以来10年が経過した。この間「家庭科教育'87　時代に応えるカリキュラムの研究」（高橋類子ら、1987）では、小・中・高の児童生徒と教師間における人間関係の事例を収集し分析することにより、家庭科教育の問題点を明らかにした。それに続く授業実践（高橋類子ら、1990）においても、まず、人間について把握し、次に物について配慮する姿勢をとり、人間関係を育成する家庭科学習の重要性を主張してきた。人間にとって家族とは、食物とは、被服とは、住居とは何かという問題意識は、それぞれの内容を学習するプロセス全体の根底に一貫して存在する問題意識であり、身体のみならず精神的健康をも含めた方向性である。

1989年の学習指導要領の改訂により、小・中・高の各学校段階に、家族領域が重視され、人間や家族に視点を当てた思考や実践が増すことは必須であり、このことは家庭科の本質をふまえ、また社会的ニーズに応える意味からも歓迎すべきことである。

これまでの家庭科教育における家族領域、また現状の学習内容は家族という内容項目として独立しておらず、他教科例えば道徳や特活との重複も考えられ、指導の目標や内容を明確に設定することが難しいと、指導回避する傾向があった。しかし、最近は、実践例を示した場合、指導する側に少しずつ暖やかな変容の兆しが感じられ、自分が担当する学習者の実態や諸般の事情を考慮して実践したいと意思表示する教育者が多くなった。

本研究では、小・中・高における家族領域の系統性を教材研究と実際に授業を展開し、その時の児童生徒の反応や担当教師の歓び、苦労と困難さなどを、将来、教師となる教育学部生とシンポジウムの形式で意見交換した結果を報告する。

II　方　　法

1．実践授業対象者：小・中・高の児童、生徒　156名
　　教育学部生　　240名

2．実践授業担当者：遠山信子、本多満喜子、池野カズミ

3．実　践　時　期：1990年

4．方法：各学校段階の提案授業の学習指導（略）
　　実態や認識の調査はアンケート方式および自由申告形式を用い、回収率は100％であった。

5．内容：(1)人間関係を育成する家庭科の学習内容の見直し
　　(2)授業実践の教材研究と設計
　　(3)授業展開の実際
　　(4)シンポジウム
　　「小・中・高における家族領域学習の系統性」シンポジウムの流れを表1に示した。
　　(5)「小・中・高における家族領域学習の系統性」に対する教育学部生の認識
　　1)提案授業が児童・生徒に与えた教育的効果　5段階尺度法

2)望ましい家庭科の授業のための諸要素20項目（佐藤文子、1986）に対する認識順位づけをし3点段落評点で評価した。

3)次時への発展として考えられる領域・内容

4)シンポジウム前後の家庭科に対する認識

6. 処理：新潟大学情報処理センターACOSクロス集計により行った。

表1　『小・中・高における「家族」領域学習の系統性』のシンポジウム

時間	分節	内　　容	資　　料
13：15	1.司会	1.小・中・高における「家族」領域の系統性 2.シンポジストの紹介	・困った家族とつきあうために
13：26	2.小学校 遠山信子	1.目標 2.教材研究 3.授業実践例 (1)授業前の児童の実態 (2)授業展開 (3)授業後の児童の変容	・印刷物 ・教材教具 ・展開の概要 ・調査結果 ・VTR,OHP,スライド ・子どもの声、ノート
13：56	3.中学校 本多満喜子	上に同じ	
14：11	4.高等学校 池野カズミ	上に同じ	
14：26	5.質疑応答		
14：35	6.まとめ		・アンケート用紙

評価　☆「家族」領域の人間関係の根源にあるものを感じとれたか。
☆児童生徒への教育的効果を評価できたか。
☆シンポジウムでの提案授業が重要視したと思われる諸要素を把握できたか。
☆小・中・高の「家族」領域の系統性が理解できたか。

III　「小・中・高における家族領域学習の系統性」授業展開の実際

III-1　人間関係を育成する家庭科の学習内容の小・中・高の試案をまとめたことを受けて、家族領域学習の系統性を研究するに当たり、人間関係を育成する家庭科の学習内容の見直しを行った結果を表2に示した。各学校段階の子どものいる家族の家族構成や健康状態、生活関心、そして健康問題とその対策の4項目に視点を置き教材化の立場で整理した。その上で家族領域の学習内容を設計し、実習や資料を、学習内容と符号させてそれぞれに位置づけた。小学校の実習「わたしの想い出と地図」は家族の多様化に伴う子どもの心情を表出させるのに有効と考えた。想い出深いできごとと地図を描き、お互いに話し、聴くことを通して、快い肯定的ストロークを得ることを目指してい

る。

高等学校の実習「困った家族とうまくやるために」は家族関係でのトラブルを防ぎ、巻き込まれたトラブルから早く離脱するためのものであり、予防策でもある。また、家庭の運営者としての時間の構造化の実習は、時間を過ごす6つの方法を組み合わせて、大人の欲求を満たす能力・態度を身につけ、良き家庭の運営者へ一歩前進することを願っている。

生活関心では、地域行事へ参加から近隣との交流、そして地域社会への参加へと発展させるよう設計した。

表2　小・中・高における家族領域学習の系統性

内容項目 / 段階学校	家族領域学習	実習（資料）	家族構成	家族の健康状態	生活関心	健康問題と対策
小学校	・わたしの家庭 想い出深い出来事と育った場所の地図 ・子どもの誕生を願う家族 ・わたしの仕事 家族と家庭の仕事 ・わたしと家庭生活 団らん 自分の生活時間の使い方の工夫 家庭への協力、金銭収支	わたしの想い出と地図 家族の手紙 （へその緒） （赤ちゃんの成長ビデオ） わたしの仕事調べ 自分の生活時間表作り 小遣い帳の記入	30歳代夫婦 6～12歳の子ども 50～60歳代の祖父母	健康状態については問題の少ない時間	子どもの教育 保護者の仕事 住まい方 地域行事への参加	う歯、視力低下 肥満傾向、胸部脊柱異常などの改善 生活関心が健康とはなれる時期
中学校	・家族と家庭生活 家族のつながり 家庭の機能 ・家庭生活と消費 家計のしくみ 買い物の仕方 消費と貯蓄 ・家庭の仕事と行事 年間の家庭行事 暮らしのマナー	（人間関係サークル） ロールプレイング 例）・こづかい値上げ ・献立で対立 ・気にいらない服 ライフプラン 家計簿の記入 エコノロジー商品と表示の読み方 マネープラン 家庭行事の計画 近隣との交流	30～40歳代の夫婦 12～15歳の子子ども 50～60歳代の祖父母	夫婦には成人病がはじまる時期 子どもの健康状態については問題の少ない時期	子どもの成長と心理 保護者の仕事 住まい方 近隣との交流	非行、登校拒否などの問題の対策 性の問題 成人病予防
高等学校	・家族と家族 家族の人間関係 創設する家庭 家庭に関する法律 家庭と社会の福祉 生活に関する情報の活用 ・家庭経営者の欲求 ・家庭の経済 収入と支出　消費 収入労働と家事労働 消費者問題	「困った家族とつきあうために」「悩みの相談」「法律相談」 ライフステージ 社会福祉施設訪問 社会保障制度調査 家族の生活時間の構造化 「家計」調査 カード利用法 消費者問題調査	40歳代の夫婦 16～18歳の子ども 60～70歳代の祖父母	夫婦については成人病の増加、精神障害受療率の増加 子どもの健康状態については問題の少ない時期	家庭生活 子どもの進路 家庭経営者の仕事 住まい方 地域社会への参加	精神衛生 成人病対策 性の問題 高齢者の関係の喪失 現状維持と回復

III-2　小学校家庭授業展開の実際

1. 単元　「わたしと家族」

2. 単元と児童

(1)育てたい子どもと教材の価値

ア．問題追求の状況

・　5年単元「気持ちのよい住まい」の学習で、子どもたちは快適に暮らすための掃除の工夫を健康な生活と結びつけて考えてきた。観点を与えれば、自分の生活の「どこを、どう見直していくか」を考えることができる。

・しかし、掃除など家庭の仕事は母親がやってあたりまえと考え、自ら家庭生活に働きかけていくことが少ない。自分の立場の見方・考え方からの追求におわりがちで、家族の願いや立場から生活を見直し追求を進めることはまだ不十分である。

イ．子どもへの願い

・　自分と家族の願いから家族のつながりを見つめ、家族は愛情によって結ばれ、協力し合っていかなければならないことを実感し、家族の一員として自ら家庭生活にかかわっていく子ども。

ウ．教材の価値

・　「家族って何だろう」と原点に返って家庭生活を見直しさせる。このことによって物の豊かさのみに目を向けて家族のつながりを考えがちな子どもを、心の触れ合いや愛情の結びつきからも考えさせたい。その中で家庭は人間が成長していく場であること、仕事の協力や団らんの工夫など、家庭生活に協力しようとする意欲を育てることができる。

・　6年生になって自分の成長を見つめようとする意識が出てきた子どもたちは、自分が家族の一員であることを自覚し関心を持つ。自分の生活をよく見つめることで、家族「一緒にくらしている人」と無意識にとらえてきた考えを見直そうとしてくる。自分にとって家族はなぜ大切なんだろうと考え自分と家族のつながりへ追求を進める。思い出深いでき事の地図を作成する中で、父母との深いつながりを具体的に知った子どもたちは、家族を支え合っている心のつながりからとらえ直し、新たに認知する。さらに、現在の自分を見つめ直し家族のために役立つことは何だろうと意識して仕事の協力や団らんの中に自らかかわっていこうとする。

　このような追求の中で、家族に対する思いやりを新たに認知しながら、家庭生活をよりよくしようとしていく。家庭科の学習を進める能力が育成される。

3. 単元の目標

◎　自分と家族のかかわりに着目させ、家族は愛情に支えられ協力し合って生活をしていることに気づかせ自分も家族の一員としての役割を自覚し、協力していくことができるようにさせる。

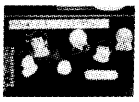
4. 本時の指導計画

(1)本時の主眼の組織

◎　自分が誕生する時の父母の願いや苦労に着目させ、父母をはじめとする家族の深い愛情の中

で育てられてきた自分であることに気づかせる。

(2)授業展開の実際------授業展開を図－小１に示した。

過程	教師の拘わりと予想される児童の反応	留　意　点
構 え 10分	T_1 わたしの誕生って、一家にとってどんな出来事なんだろう  M　子 （新しい命の誕生で、家族みんなが喜んでいる。） I　夫 （赤ん坊は小さくて可愛から、にぎやかで楽しくなる。） 家族のつながりからとらえ考えると、団らんから楽しい出来ごとと、とらえる考えとが出される中で、大変なこともあると意見が出てきた。 T_2 新しい家族の誕生は喜びや楽しさだけだろうか。 学級集団は自分の具体的な事例を上げて話合う中で、「大変なこともたくさんあるのに、なぜうれしいのか父母の願いや、やってくれたことを知りたい」という動きになった。	T_1は、家族を自分の楽しさから考えてる子と家族のつながりから考えてくる子の交流をはかっていきながら問題意識を高めさせた。 T_2 で考えのずれを取りあげた。 「苦労が多いのになぜうれしいのか」具体的な事実からはっきりさせたいと問いを持ったのでT_3へうつる。
内 容 把 握 25分	T_3 S子さんのお母さんが大事にしている「へその緒」です。どうして大事にしていたのか、赤ちゃんの成長ビデオとつないで考えましょう。 （・赤ちゃんとお母さんの命をつなぐきずなのだ。 ・お母さんだけでなくお父さんやおばあちゃんも助けてくれていた。 ・成長をみんなで見守っていた。） （・赤ちゃんとお母さんはお腹の中にいたときから強い結びつきがあったのか。 ・栄養や病気にならないようにいつも気をつけてくれた。） 既有知識経験・へその緒・ビデオをつないで、赤ちゃんの誕生を父母との強いつながりや、健康に育てるために苦労していることからとらえ、助け合っている家族のイメージを明確にした。 T_4 誕生について自分の考えたことを発表しましょう。 （・小さな命を守るには一人ではできない。家族が協力するからきずなが強くなる。） （・人数が増えることは楽しいだけでなく、苦労もいっぱい出る。だから家族は助け合っていく。）	T_3 が教師の支援 （へその緒 赤ちゃんのビデオ）を提示し、これらをつなげて考えさせた。 学びを進める姿 自分の中に得た情報をもとに一家にとっての赤ちゃん誕生の意味を家族とのつながりで検討させた。 姿の評価 M子…自分と家族の心のつながりをイメージした。 I夫…家族が助け合っていることをイメージした。 T_4 では互いの考えを聞き合う中で自分と家族のかかわりを深めさせた。
振 り 返 り 10分	T_5 みなさんの家の人からもみんなの誕生の時の事を手紙に書いてもらってあります。読んで感じたことを書き加えましょう。 （病気で入院したときお父さんもすごく助けてくれた。家族から励まされたり支えられたりしてきた。） （お腹の中にいたときから元気がよかった。明るい子になってほしいと願って名前をつけた。） 自分宛の父母からの手紙を読み、今まであたりまえだと思っていた中に自分を思う深い愛情があったことを実感した。	家庭は自分が成長する場であること。 家族の愛情によって支えられてきた。 自分のイメージを明確にしたか評価させた。 次時は家族の一員として自分を見つめ直していこうとすることへつなげた。

図－小１　　小学校家庭授業の実際

～父母からの手紙～

暁夫へ

1978年12月29日、午前４時43分、暁夫は生まれました。22日が予定日だったのですが生まれず、24日クリスマス・イブの日がおじいちゃんの誕生日でしたから、その日に重なるといいなと思っていたのですが、その日も気配がなくすぎてしまいました。お医者さんに聞きましたら、「30日から正月の４日まで病院は年末年始のお休みに入りますから、その前に生まれるといいのですがねえー。」っとおっしゃいました。その言葉がきこえたのか、29日にようやく生まれたというわけです。

今思い出してもおかしいのですが、生まれるまではお父さん、おじいちゃん、おばあちゃんの三人は「男の子でも、女の子でも元気な赤ちゃんならどっちでもいい。」といっていたのに、男の子とわかったら開口一番、「男の子でよかったー。」といったのですよ。

名前は２日位ですんなりと決まりました。

暁夫の暁は暁(あかつき)、つまり夜明け、早朝の意味です。一人の人間の人生の始まりにふさわしいと思いましたし、とてもバランスのとれた美しい漢字だと思いました。暁夫の夫は、男の子の名前に以前はよく使われていた字なのです。二と人を組み合わせた字であることがわかるでしょう。人は決して一人では生きていけないのです。だれか助けてあげたり、助けられたりと、協力したり、支えあったりして生きていくのです。お父さんも、お母さんも暁夫という名前で、とても気にいっています。あっちこっちに大勢いそうでいない名前ですよ。

暁夫はどう思っているかな？

時々暁夫という名前にこめた、お父さんとお母さんの気持ちを思い出して、自分の周囲にいる人たちを思いやるやさしい人間になってほしいです。

お母さんより

私と家族についてまとめてみよう　　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

～家族って何だろう～

ぼく
の誕生
わたし

？今の私がいるのは、どんなふうにしているのかな。
？どうして、ぼくが生まれたのかな。

昭和53年12月29日午前４時43分に生まれる。当時はミルクをもらわない時は、しょっちゅう泣いた。お母さんの話だと、ある時、ぼくがトコトコ歩いたらいきなり茶色のものをだした。それをお父さんがとって、まじまじと見ていたらいきなり、「うんちだあー。」といってさわいだそうである。しんかんせんを「かんしぇんしぇん」ということがいは、ちゃんと日本語を何才かわからないけど話せるようになったといっていた。お母さんに名前の由来を聞いたら、「朝早く生まれたから暁夫という字をつけた。」といっていた。ぼくは、ある物がないとねむれなかったらしい。最初は実家にいたが、そのうちに、長岡にひっこしをしてくらすようになった。（お父さんの仕事の都合らしい）（体重3260ｇ、身長51㎝）

◎家族は、どんなことをしてくれたのだろうか？

お父さん	とても喜んでくれた。遊んでくれた。Milkなどをのませてくれた。（大学の仕事をしながら。）
お母さん	おふろへいれてくれたり、Milkをのませてくれた。おふろの中で良い気持ちでうんこをした時もあった、といっていた。
おじいちゃん	おもちゃをいっぱい買ってくれたらしい。
おばあちゃん	子どもがうまれたことをとなりの家でじまんしている。よっぽどうれしかったらしい。

III-3　中学校家庭授業展開の実際

1　領域　家庭生活

2　題材　家族の生活

3　題材と生徒

ほとんどの生徒の家族構成は4～5人の核家族であり、親族家族で祖父母と暮らしている生徒は38名中6名（16%）である。親とはうまくかかわっているが、きょうだいとはうまくいっていない者がかなり多くなり、祖父母との関係はさらに希薄な状態である。家庭での役割は掃除などを分担している。男子の約半数は決まった仕事はない。家族に対する認識は、病気や困った時に大切であるなど依存的な答えが多い。一方日常を通していつでも大切、団らんの時大切と家族との絆を強く感じ取っている生徒もいる。家族との人間関係は、家族が自分にしてくれたにもかかわらずわずらわしいと感じた、無関心的態度「家族はＯＫだが自分はＮＯ」の事例が最も多く、家庭でも扱いにくい中学生の特徴が出ている。本領域の学習の中に人間関係を中心にして家庭生活を考える内容を組み入れたなら、人とのかかわりをうまく取り入れ快適に生活できる生徒を育てられるのではないかと考えられる。この題材の留意点としては、学習前に取ったアンケートの結果を授業の中で取り上げながら身近な学習として、興味関心が持続し高まるようにしたい。

4　題材の目標

(1)　家庭生活の内容と特徴を知らせ家庭の機能と家庭生活の意義を考えさせる。

家族の生活時間を調べたり、家庭内のいろいろな営みを見いださせながらまとめる作業を通して、家庭の機能や家庭生活の意義を確認させる。学習のまとめとして家族関係の機能の一覧を資料として提示する。

(2)　家族構成や家族の立場と役割について考えさせ、自己と家族との関係について理解させる。

アンケートの集計結果をもとに発展させる。家族と自分との関係についてはロールプレイングを通して、よりよいかかわりとなるよう家族の立場にたって考えるような場面を設定する。

5　指導計画　　5時間扱い

(1)家族構成、家庭生活の内容。		1時間
(2)家族の役割、家族関係。	本時2/2	2時間
(3)家庭の仕事、ライフプランの作成。		2時間

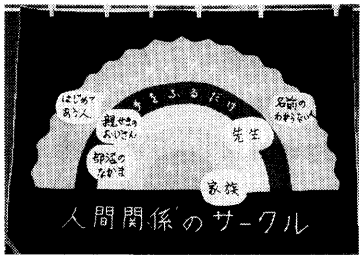
6　本時「私と家族との関係」の指導

社会生活での人間関係を「人間関係サークル」によって基本的な構えを思い起こさせ、家族が自分にとって一番身近な関係である事を確認させる。次に、日常生活家庭での基本的な人間関係のいろいろな場面を分類したアンケートの集計から、その時々の自分や家族の気持ちを考えさせ、ロールプレイングを通してお互いが気持ちをわかりあおうと努力すれば、よりよいかかわりとなる事に気付かせる。

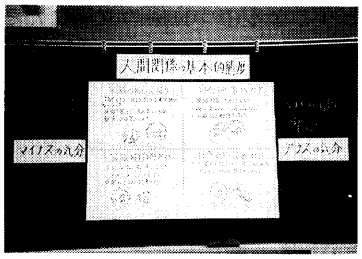
7　本時のねらい

家族との生活から基本的な家族関係の分類を知り、ロールプレイングを通して家族がより良い関係であったかどうか考えさせる。図－中1に中学校家庭授業展開の実際を示した。

内　容	教師の働きかけと生徒の反応	資　料　　留意点
導入　8分 日常の地域社会における人間関係	T　本時は人間関係について考えてみます。 いろいろな関係の人とあいさつをしてみましょう。 S　友人、先生、近所の人などを想定してあいさつした。 T　家族はどの関係でしょう。 S　抱き合える関係です。	@人間関係のサークル（写㊥1） なるべく身近な人物を想定して活動させた。
展開　7分 家族との関係	T　一番身近な家族との関係について考えましょう。 それぞれの時の自分や家族の気持ちはどうだったでしょう。 S　自分のＯＫの時は楽しく、情緒が安定する。 自分ＮＯの時はいらいらして不安である。 家族の気持ちはあまり考えた事がない。	@人間関係の基本的態度（アンケートの集計より）　（写㊥2） 楽しい　嬉しい　良かったなどのプラスの気分と　気分を悪くした　腹が立ったなどのマイナスの気分に分けて考えさせた。
ロール プレイング 18分	T　それでは次のような場合について考えてみましょう。 S　こづかいの事について家族と対立とている場面を演じた。 献立について家族の好みがあわない場面を演じた。 買ってもらった服が気にいらない場面を演じた。 （写㊥3）	登場人物を決めてその時の気持ちや言い分をあらかじめ考えさせておき、うまく解決するパターンとしない時を演じさせた。
10分	T　気づいた事を話し合いましょう。 S　子供は自分の言い分しか考えてない。 親は子供の気持ちをわかってない。 お互いに話し合いが必要だ。 解決できる方法があると思う。 あんなやりとりがあるときはこじれる。 自分自身の事も知る必要がありそうだ。	@用意したプリント 自我の変容を容易にする言葉と態度 自我の変容を妨げる言葉と態度 はじめにグループで自由に話し合わせ、つぎに事例毎に全体で話し合わせた。
終結　7分	T　この時間で考えたことをまとめよう。 S　プリントに従ってまとめた。	@まとめのプリントを与えた。



写真中1　人間関係サークル



写真中2　基本的構え

写真中3　ロールプレー

図－中1　中学校家庭授業の実際

III-4　高等学校「家庭一般」授業展開の実際

1、題材　家族と家庭生活　　―家族の生活と生活設計―

小学校・中学校に於ける家族関係の学習を踏まえて、高等学校では家庭を創設し家庭生活を経営するという生活的自立に重点を置き、未来に志向する目を養うため、将来最愛の人と生活する家庭を想定させ豊かな人間関係をつくり、長い人生・高齢者社会を生き抜く力を、総合的・実践的に習得させる。特に、人間関係の育成に視点をあて授業実践を試みた。

2、指導目標

・家庭生活の重要性を知り、家族や家庭に対する基本的な考え方を理解させ、変動する社会へ適応できる能力を養う。

・時間、労力、経済を有機的、総合的に学習させ家庭を創設・充実・向上さる能力を養う。

・適切な生活設計を立てて実行する能力を養い、生涯教育、社会福祉のあり方について考えさせるとともに参加する態度を養う。

3、指導内容

高等学校「家庭一般」授業展開の実際を表－高1に示した。

III-5　提案授業に対する評価

1　提案授業に対する教育的効果を学校段階別に5段階尺度で図1に示した。小学校では、平均評点4.6で「非常に効果がある」に位置づけられ、中・高等学校では平均評点4.1，4.0で「やや効果がある」に位置づけられた。

2　望ましい家庭科の授業のための諸要素20項目に対する認識の順位づけをし、3点段落評点で評価した結果を図2に示した。各学校段階とも「家庭での実践に結びつく」が1位で、小・中・高の順に1216、1076、1158点であった。次に小学校では「有効な教具を使用していた」985点、「児童を主体的に参加させた」798点続いた。中学校では「主体的な参加」1053点、「生徒の実態を把握していた」1009点であり、高等学校では「社会的ニーズをおさえていた」998点、「家庭科の本質をおさしえていた」831点であった。

3　指導するときに困難を感じる要因は、小学校では1位「家庭の問題」20%、2位「発達に応じた指導内容」18%、3位「単親」14%であった。中学校では「思春期・反抗期」28%、「興味・関心をもたせる」10%、「家庭の問題」「指導内容」8%の順に比率が高かった。高等学校では1位「指導内容」15%で、2位は「興味・関心をもたせる」10%、3位「家族に対する学習者の立場」「家庭科への無関心」9%であった。「指導内容」は、各学校段階とも指導するときに困難を感じる要因の1から3位まで入っている。本研究で「小・中・高における家族領域学習の系統性」の授業展開の実際を行った最大の意義がこの点にあるといえよう。

4　指導者が苦労したと思われる要因は、小学校では1位「家族の一員であることを自覚させる」20%。2位「発達に応じた指導内容」「教材・資料の工夫」13%であった。

表－高１　　—家族と家庭生活—　　※学習形態、○全体活動、□Ｈ・Ｐ、◎家庭クラブ、

時間	指導内容	指導上の留意点	実験・実習・その他		
18 10 (1)	ア家庭と家族 (ア)家庭の機能 ・家庭とは		・家庭生活のいとなみにおける知識・技術的行為にかかわる要素 ・家庭・家庭生活に関する意識調査		○ ○
		・「家族とは何か」家庭の重要性を理解させ、これからの家庭のあり方を考えさせた。 ・家庭の機能の移り変わりについて理解させた。	・家族との話合い・「私の家庭」の作文など		○
		・現代の家庭の機能・問題点を把握させ、各自の家庭および地域の家庭について考えさせた。	・家族や教師の勧める１冊の本 ・新聞の切抜き（家庭生活・家族）		○ □
(1)	(イ)家族の意義 ・家族とは ・出生家族と創設家族	・「家族とは何か」を理解させた。 ・出生家族と創設家族を理解させた。 ・核家族の増加とその原因を考えさせ核家族、親族家族それぞれの長所・短所を理解させた。	・ロールプレイ（サイコドラマ創作） ・家族構成の形態 ・家族の発達課題	 図 図	△
(2)	(ウ)家族の人間関係と役割 ・家族の人間関係 ・家族の役割	・健全な家庭生活は家族相互の愛情と理解が基盤であることを理解させた。 ・家族でそれぞれの果す役割と責任を自覚させた。	・血縁家族と他人家族 ・家族関係の機能 ・家族と手紙交換、家庭通信	 図	 ○
	・家族のマナー	・円満な人間関係を保ためのマナーを身につけさせた。	・日常生活のマナー		△
(1)	(エ)家庭に関する法律 ・家族・家庭の法律	・婚姻、夫婦、親子、扶養、相続その他の法律などについて理解させた。	・新聞の切抜き（法律の相談・悩みの相談など）		□
(2)	(オ)家庭と福祉 ・福祉とは	・高齢化社会に対応した福祉のあり方について考えさせた。	・老人と環境	視	◎
	・社会保障	・障害者の福祉のあり方を考えさせた。 ・社会保障制度を知り、家庭生活のあり方を考えさせた。	・社会保障制度の調査		△
	・老人福祉と看護	・充実した老後を送るための社会福祉と家族のかかわり方を考えさせた。 ・施設型・在宅型など家庭の役割はどのようになっているか調べさせた。 ・家庭内における老人の生き方や介護の問題について話し合わせた。	・家庭と老人問題 ・老人ホームなどの奉仕活動（年間） ・三世代家庭の生徒の意見発表		◎ ◎ △
(2)	(カ)生活時間 ・生活時間の構造化	・生活時間や配分や計画について基本的な考え方を理解させた。	・時間の構造化の要素 ・夫婦・家族の協力	図	○ ○
	・生活時間と職業	・職業を持つ場合の家事作業の時間を考えさせた。	・就労状況		
	・家事作業と能率	・家事作業の重要性を認識させ、その能率化について考えさせた。	・施設設備と設置 ・家事作業の社会化	視	
	・生活時間と余暇	・生きがい、余暇の活用を考えさせ、自己の生涯教育に発展させた。	・奉仕活動・趣味など ・労働・生活時間・休養の時間管理		◎ ○
(1)	(キ)生活設計 ・生活設計の意義と方法	・短期・長期の目標を立てて生活設計の必要性を認識させた。	・ライフライン（ライフステージ） ・「家庭一般」学習内容と生活設計との関連	図 図	○
	・家族周期と生活時間	・家族周期の変動と特徴、各段階における問題点を考えさせた。	・生活設計・家庭経営		
7 1	(ク)家庭の経済活動 (ケ)これからの家庭生活の現状と問題点				

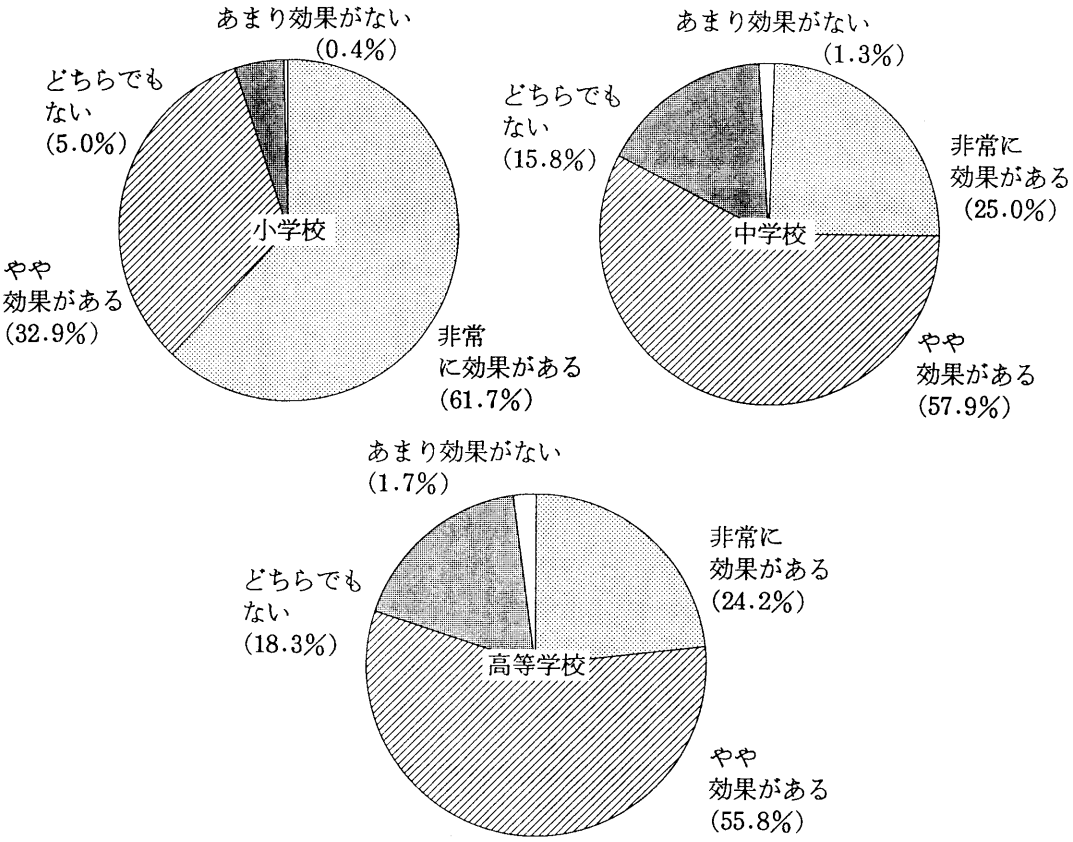


図1　児童・生徒への教育的効果

表3　家族の学習内容から次時への
発展として考えられる領域・内容

No.	領域	%
1	家族と地域社会との関係	15.0
2	家族の役割	7.5
3	家族のつながり	7.1
4	将来のライフサイクル	6.3
5	すべての領域・内容	5.4
6	他教科・他分野	5.4
7	保育	3.3
8	高齢化	2.9
9	家庭科への認識の変化	1.7
10	食物	1.7
11	住居	1.7
12	福祉	1.7
13	その他の感想等	2.5
14	無回答	47.8

授業実践例

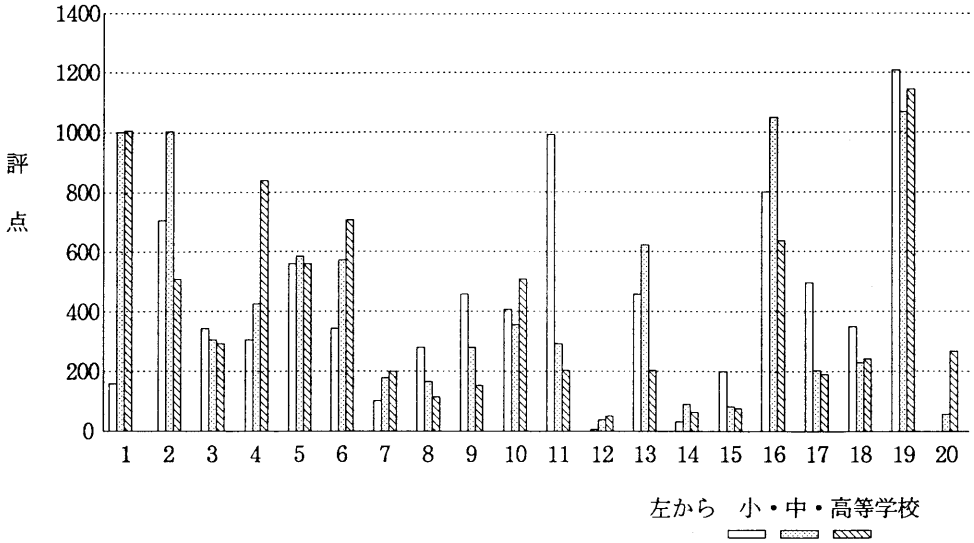


図2　望ましい家庭科の授業を行うための諸要素

1. 社会的背景とニーズとをおさえていた。
2. 児童・生徒の実態をよくつかんでいた。
3. 児童・生徒の個性を把握し伸ばすためにも、授業内外においてコミュニケーションをはかるように努力していた。
4. 家庭科の本質をおさえた授業であった。
5. 題材の目標をきちんとおさえた授業であった。
6. 発達に応じた学習内容であるように注意していた。
7. 幅広く参考文献にあたり、教材研究を充分にしていた。
8. 動機づけが授業に有効に生かせるように工夫していた。
9. 導入方法に工夫をこらしていた。
10. 的確な資料を豊富に用意していた。
11. 有効な教具や視聴覚器材、教材できるだけ活用していた。
12. 教科書の使い方を工夫していた。
13. 普通の授業と異なったアイデアの指導方法で工夫していた。
14. 時間配分を工夫していた。
15. 児童・生徒につまずき箇所を意図的に創ったり、ショックを与えるように工夫していた。
16. 児童・生徒が主体的に授業に参加できるように工夫していた。
17. 児童・生徒に“ああ　そうか”、“よく　わかった”と言わせるように工夫していた。
18. 児童・生徒にもっと学びたいという欲求を起こさせるように工夫していた。
19. 学習したことがらが、家庭での実践に結びつくように指導していた。
20. 消費者としてのあり方を、生活する人間として自覚させる授業であった。

中学校では1位「思春期・反抗期」11%、「興味・関心をもたせる」8%、「家族の役割・関係を理解させる」7%であり、高等学校では1位「指導内容」15%で、2位は「興味・関心をもたせる」8%、3位「家族に対する学習者の立場」7%であった。中・高の指導者が苦労したと思われる要因は、指導するときに困難を感じる要因と同一であった。

5　提案した家族の学習内容から、小・中・高を通して次時への発展として考えられるのは、1位「家族と地域社会との関係」15%、2位「家族の役割」8%。3位「家族のつながり」7%、4位「将来のライフサイクル」6%、5位「すべての領域・内容」5%であった。

6　シンポジウムの前・後の家庭科のイメージの変容を3点段落評価でみると、「実践的教科」2052点、2位「総合的教科」1275点であったシンポジウムの前のイメージから、シンポジウム後は「総合的教科」1770点、2位「家族のつながりを考える教科」1699点へと変容した。

Ⅳ　ま　と　め

各学校段階で男女が共に学ぶ「家族」領域の教材研究と授業展開を試み、児童生徒の成長に合わせた教材開発を行い、人間として幸せになってほしいという教師側の願いを具体的に提示し、児童生徒と学生に考えさた。実践例を通して、教師側の授業展開と児童生徒の活動状況を仮説を立てて検証した。

結果は次の通りである。

1. 小学校では、児童が自分の誕生と家族との関わりを学習することにより感動し、家族学習への興味・関心が湧き、家族の一員であることを自覚した。
2. 中学校では、家族領域の学習の中に人間関係を中心に教材構成した。人とのかかわりに無関心であった生徒が関心的、好意的態度に変容した。
3. 高等学校では、現在の社会および家庭生活の実態から問題点を把握することにより、今の生き方が将来の生活の基本となることを知り、人間として幸せな生き方ができる能力を身につけると同時に、人生の終焉についても話し合うことができた。
4. 大学では、家庭での実践に結び付く授業であり、教育的に効果があったと評価した。

謝辞　本研究のシンポジウムの膨大な資料の印刷に、協力いただいた教科係の皆様に厚く御礼を申し上げます。

文　　献

白井幸子：看護にいかす交流分析、医学書院（1983）

佐藤文子：望ましい家庭科の授業のための諸要素の検索、日本家庭科教育学会誌、29(1) 5～10（1986）

高橋類子、斎藤新治、木村節子、岸本洋子、本多満喜子、阿部照美、長谷川かよ子、桑原信子：「人間関係を育成する家庭科の学習内容」、日本家庭科教育学会編、家庭科教育'87時代に応える－カリキュラム研究－、3～9　（1987）

高橋類子、木村節子、岸本洋子、薄田恵子、本多満喜子、長谷川かよ子、桑原信子、土屋道子、斎藤新治：家庭と地域社会における人間関係を育成する生活マット・小物作りに関する実践的研究、新潟大学教育学部付属教育実践研究指導センター紀要、9　45～63（1990）
台　利夫：サイコセラピー9、ロールプレイング、日本文化科学社（1986）